ディスカッション

島村： 4人の皆さまがお揃いになりましたので、これから、皆さん方のなかで、疑問点も含めて話し合いをしていきたいと思います。まず、池田先生に、最後に倉俣先生にお話していただいたのは、倉俣さんのやっていらっしゃることは、民間のプロ球団の、一つのアカデミーとしてやっている教育。池田先生は、学校教育、学校スポーツのなかでやっているお話しでした。学校スポーツの専門家である池田さんが、社会スポーツ、民間の企業という言い方がふさわしいかどうか分かりませんが、学校の組織のなかではなくて、民間でやるような、そういうことについてはどうお感じになりました。

池田：こどもたちのスポーツ環境は、もちろん学校もありますが、地域や倉俣さんがされているようなものと、神尾さんが指導されてるようなこと、いろいろな機会があっていいと思います。ただ、役割分担は多少違うという印象なんですね。と申しますのは、倉俣さんのところは、年間40時間やっておられるのですが、学校では、投げることやベースボール型の授業は、せいぜい8～9時間です。そうしますと、そのなかでどんなことを教えていったらいいかというとやはり、かなり制約せざるを得ないのです。そうしますと、その中身の整理が必要となってきます。

島村：大澤先生はどうお感じになりますでしょうか。

大澤：自分が野球少年だった頃を思い浮かべて、ああいう学校があったら行きたいなあと思いますね。タイの場合では、オリンピック選手が比較的学校の先生になりやすいようです。小学校の先生にも体育の専門の先生がかなり入ってるんです、日本の学校はどちらかというと、特に小学校は体育はこどもは好きだけど、先生はどうでしょうか。我が家の長男が小学校2年生の時に、一学期間中ずっと縄跳びやっていましたね。先生が考えられないのかもしれない。だから、民間のノウハウとか、ヒューマ・リソースを活用するっていうのは大いにあっていいのではないかと感じました。

島村：神尾さんは、テニス界でのこどもの指導のなかで、今のジャイアンツ・アカデミーのような、いろいろな組織があると思うんですけれども、テニスですともっと、アメリカに行くと専門のプロプレイヤーを作っていくという、そういうアカデミーというのはありますよね。（神尾：はい。）こどもの頃からこういう指導をしていくと思うんですけれども、今プロ野球球団のこういうこどもたちへの取り組み方、その先にプロが見えるかどうかは別にして、それは、どういうふうに感じました。

神尾：とてもすばらしいなというふうに感じます。テニスは、育てるという施設はありますが、ここまで、元プロの方とか、そういう方と接するテニスクラブは少ないと思います。

午前中は勉強、午後にはテニスとトレーニングというシステムで子供から現役プロまでそこで生活しているくらい良い施設があります。日本にはなかなかそこまでの施設がありませんので日本の選手は、私もそうでしたが、アメリカやスペインのそういうシステムでやっているキャンプに短期入門する選手も多いです。やはり子供達はプロを見て夢を見ます。日本でもそのような施設があったらとてもすばらしいなというふうに思います。

コーディネーター
スポーツジャーナリスト
国士舘大学大学院スポーツ・システム研究所客員教授

島村　俊治

プロフィール
東京都出身。1964年早稲田大学第一経済学部卒業。NHK入局。アナウンス室エグゼクティブアナウンサー、夏冬五輪実況８大会、各種世界選手権、米プロゴルフツアー、大リーグ、国内のプロ野球、甲子園の高校野球等数々の競技、大会を実況中継。2000年退局後、スポーツジャーナリスト、スポーツアナウンサーとして独立。CS、BSを中心にプロ野球中継。その他、スポーツ実況、司会、講演、執筆、イベント活動等。著書に「星野仙一、決断のリーダー論」「笑顔と涙をありがとう」「勝者と敗者」等。

島村：今、お話のあった、アメリカはフロリダに大きなシステムがあるんですね。例えば、シャラポワは、６歳の頃ロシアを逃れて、そのアカデミーに行って、そして、今のような選手になっていきますね。でも、これには、例えば、お金が無いとなかなかできない。シャラポワの場合は、実はお父さん、わずか、500ドル抱えてアメリカに渡って行ったという、そういう開拓者みたいなところがあったのですが、一般的にはなかなかそうはいかない。裕福でないと難しいですよね。

神尾：そうなんですが裕福でないとできない、というわけでもなく、シャラポワの場合はお父さんが一生懸命交渉したと思います。彼女の素質をみてもらって絶対に強くなって勝って、出世払いにしてほしいと。そしてその素質を見込まれたのです。お父さんの努力の結果でもあるのではないかと思います。

島村：倉俣さん、御三方の先生方から、大変お褒めのお言葉でありましたけれども、

倉俣：ありがとうございます。

島村：どういう風にお感じになりますでしょうか、その辺のあたりは。

倉俣：はい、ジャイアンツがこういうことを始めたということでたぶんインパクトは非常に強いんじゃないかとは思いますけども、コンセプトとしては、すでに、サッカー界がずっとされていて、たまたま、FC東京のジュニア強化部長が先輩でおられるということで、全てノウハウを教えて頂いたり、キューバに３ケ月ほど行かせてもらった時に、向こうのこどもたちはこういうシステマティックな教育を受けてたと。キューバは1200万人しか人口がいないんですけれども、日本と同等レベルの実力を兼ね備えてる。その部分では、きちんとジュニアから計画的に指導していけば、日本の人口をもっても、十分世界でやっていけるんじゃないかな、というのはあらためて感じているところです。

島村：ということは、この大学に学ぶ生徒諸君のなかにも、こういうジャイアンツ・アカデミーのような、こういう組織ができていけば、そういうなかで、自分のやってきた勉強をここに生かしていくってことはできますよね。

倉俣：そう思いますね。

島村：では、池田先生の先ほどのお話のなかで、いくつか問題点のなかで、教える側と、それから教わる側のある種の問題点みたいなものがある、というようなお話もあったんですけれども、教える側の問題ですとか、その辺りはどういうふうに、今の小学校の教育のなかでは、とらえてらっしゃるんですか。

池田：先ほど、新しい学習指導要領の話をしましたが、現在まで10年間続いたゆとり教育の反省に立っていると一般的に言われているのです。その、ゆとり教育はこどもたちの自ら学ぶ力ですとか考える力などの、どちらかというとこどもの側に立って意欲や関心を引き出そうということでした。しかし、それだけではこどもたちにきちんと力が身につかないのではないかという反省もあったのです。今回の学習指導要領は、体育だけでなく国語、算数、理科などの全部の教科で基本的にこどもたちが学ぶ内容を明らかにしようとしています。これは、習得型の学習と言われています。そういうのをベースにして、それを活用したり、自ら探求したりすることになります。学習指導要領は内容の提示ですが、学習スタイルの提案も一緒に出ておりまして、若干、指導の仕方が変わってくる可能性はあると感じております。

島村：これは、神尾さん教える側ですね。今日の指導のなかでも、教える側の問題ですとか、それから、環境ですとか、そういうことも含めて、どうなんですか。

神尾：テニスでは教え方が一つに統一されているわけではありません。色々な教え方、色々なスタイルがあります。海外と少し違うなぁと感じるところは国を挙げて選手を育てることが多い海外に比べ、日本は個々のテニスクラブで強い選手を出し、“ここで育てた!!”“私が育てた!!”と言いたいというのがよく見かける光景です。

それからジュニアを教えているテニス教室では海外の良さを取り入れ、基本をかっちりやらせるというより自由に好きなようにやらせる、自由スタイルの教育をされるところも多くなりました。

海外にはトップ選手がたくさんいますから、教え方など良いところはどんどん取り入れていくべきと思いますが、日本の良さというのが無くなってしまっているのではないかなと感じるところもあります。

例えば海外には日本のような敬語がありませんので、先生にあいさつをするのも“HAI！”や“BYE～！”ととっても気さくな雰囲気です。ですが日本では、先生に対して“どーもー”や“バイバイ”はよい光景ではないと感じます。

しっかりとした敬語やあいさつができるのも日本の良さといえるのではないかと思います。ほめて育てるのはとても大切なことと思いますが、マナーやルールを無視してただほめるだけというのは教育という面でどうなんだろうか？と思ってしまいます。楽しければ続けてくれるのは確かですが、楽しいだけでいいのだろうか？と教える側にとってはすごく難しい問題点だなと思っています。

島村：非常に興味深いお話だったと思うんですね。よく、人を育てるには褒めろっていうことを言われます。生徒の皆さんは褒められてここまで育ってきてるんじゃないかなと思います。私も実は、褒められてアナウンサーになりました。私の授業で話をするんですが、私はアナウンサーになりたくてアナウンサーになったんじゃないんです。ある人に褒められたので、アナウンサー、しかもスポーツ実況アナウンサーの道をずっと歩んできました。別に私に能力があったわけではないんですね。褒められたことをどういうふうに自分が、その時に感じ取って次に進めるかどうかで、褒めるということが生きてくるのではないでしょうか。さっき、倉俣さんのお話のなかに、２項目目に指

導者が褒めるというお話がありましたけれど、その辺りは、倉俣さんは、褒めるということについては、どういうふうに考えられます。

倉俣：特に小さいこども、小学校、幼稚園のこども、幼児というのは、自分の価値観が非常に小さくて、社会性が小さくて、ちょっとしたことでもすぐ泣くし、ちょっとしたことでもすぐ喜ぶし、という部分では、できるだけ積極的に活動、行動してもらうためには、褒めた瞬間に笑顔が出て、褒めた瞬間に元気が出るということで、怒ると、どんどんネガティブになっていっちゃうのかなと。そういう部分では、とっつきというか、スポーツが好きになってくれるためには、やはり褒めるということがベースにあっていいんじゃないかなと。それは、理論じゃなくて、毎日こどもに接していますので、そういうなかで感じています。

島村：ベースにはあって、でも、先ほど神尾さんが言われたように、何でも褒めておけばいいということではない。

倉俣：そうですね。褒めていくと、恐らくその子って自分で気付いて、また、どんどん次のステップに、やる気とか、モチベーションが高まっていくんじゃないかと思うんですけれどもね。

島村：そうですね。褒められているうちは、まだ本物ではないですよね。そこから先を、どういうふうに褒められたことを生かしていくかといくかではないかなと思うのですが。この辺りの、教える側と教えられる側のあり方みたいなのは、これは、大澤先生は、例えば、タイですとか、そういう国の今の教育事情、スポーツ事情も踏まえたうえでの、指導者などは、どういうふうに見ていらっしゃるんですか。

大澤：そうですね。タイの学校の先生というのは、非常に厳しいですね。私のいる前で、平気で子どものお尻たたいてますね。そういう意味では、日本では親も先生も、とってもやさしいですよね。

しかし、可処分時間っていいましょうか、ようするに自由時間がタイのこどもたちは非常に多いんですね。ですから、ペドメーターを付けさせて、60人ぐらい一斉に一週間ぐらい歩数を計ったことがあるんですけど、平均して3万歩ぐらい歩くのです、小学生で。一万歩なんていうのは、もう午前中ぐらいで終わっているわけですね。それぐらい、学校に行っても、家に行っても、ある意味では、放牧状態っていうんでしょうか、こどもたちが飛んだり跳ねたりいろんなことをやってます。

しかし、日本のこどもを見てると、とにかくディスポーザブルタイムが非常に少ないです。昭和の30年代と10年代では、生活時間調査で、ほとんど、変化ないんですけれども、40年代、50年代に一気にこどものライフスタイルが変わってしまいました。直近のデータですと平成18年度のデータで、例えば、高校生の平均就寝時刻が12時12分ですよ。標準偏差が1時間ですから、要するに夜中の1時半ぐらいに寝ているこどもが、全体の15～6パーセントもいるってことです。もちろん、小学校のこどもでも、12時以降に寝るこどもが20～30パーセントいる、というようなことで、時間が非常にタイトになってきている。小林先生のお話にもありましたように、大人の責任というのは、かなり大きいです。大人の社会が、こどもの社会というものをがんじがらめにしていると、そんな印象を持ちます。

島村：それと、今ジャイアンツ・アカデミーの中身をご覧いただきましたけれど、今の日本のそういうこどもたちのスポーツのあり方というのは、恵まれすぎていると思うか、それともこれが適合なのかと思うのか。例えば、大澤先生の、東南アジアでは、それこそ日本はやはり恵まれていると思われると思います。でも、倉俣さんがアメリカで学んでいた時代の、アメリカと日本のこどもた

ちの、スポーツ環境を比べてみると、アメリカの方が恵まれているのか、いやそうではないのか。その辺は、倉俣さんは、どういうふうに感じられますか。

倉俣：現時点でも、アメリカのこどもたちのほうが、はるかに恵まれていると思います。

島村：それは、どういうところが。

倉俣：私、アメリカに留学して、また何度もその後も行って、アメリカの東西南北全部の地域を見させていただいたんですけども、基本的にこどもは全て芝の上でスポーツをします。それから、野球というスポーツが２月に始まって５月に終わってしまいます。その後みんなアメリカンフットボール、バスケットボールに流れていきます。

通訳５年間しているなかで、２億円、３億円貰う選手と接するなかでですね、彼らで一年中野球をしてきたやつは誰もいませんでした。たった一人、ピッチャーが、私は一番才能が無かったんで、野球に打ち込むしか無かったと。バスケットもフットボールもやらずに、勉強と野球だけをやった。そういう意味では、あと、社会性にしても、ハード面の芝生で野球ができるという環境にしても、まだ、20年ぐらい、向こうのほうが進んでるなと感じますね。

島村：それは、高校、大学ということではなくて、こどもの頃からですね。

倉俣：そうです。

島村：今言われた二つの要素のなかに、私がいつも思っていることがあるのは、一つはですね、日本は一つのスポーツをやったら、それをずっとやってくるんですね。レギュラーになれなくても、ずっとやるんですね。アメリカの高校生、大学生というのは、いくつものシーズン制に分かれていますから、あのマイケル・ジョーダンはバスケットボールの選手です、スーパースターでした。でも、野球もやりたかった。だから、二軍の選手になってまで、一度引退して野球をやろうとしたんですね。本当はゴルファーもなりたかったんですね。

アメリカの学生さんは、すくなくとも、シーズンのなかで一つの部に属してはいません。これ、日本の方向性というのは皆んな同じなんですね。中学の頃からずっとその形をとってるんです。いろんなスポーツをアメリカの若者は楽しみます。これは、国士舘大学だけで、解決できる問題ではないのです。日本のスポーツが全部、一人が一つの種目ばかりをやり続けて行く。例え、レギュラーにならなくても、スタンドで４年間応援してでも、100人の部でも野球部をやり続けている。アメリカはそうじゃないんですね。だから、優れた選手は、一人で二つのプロスポーツの選手になる可能性を持ってる。この辺りは、倉俣さんは、どう考えています。

倉俣：まさしく、今日、小林寛道先生のおられます、アメリカということじゃなくて、こどもにどういうふうなスポーツ刺激を加えるのが、こどもの成長に一番ふさわしいのか。野球を一年中やらせ続けることがふさわしいのか、学校の体育の授業のように、バレーがあったり、バスケットがあったり、スイミングがあったり、いろいろなことをミックスさせるのがいいのか。アメリカを例に取るまでもなく、答えは出ていると思います。

島村：そうですね。私は昔、高校野球の放送を長いこと、30年ぐらいやっていました。雪国のチームは冬でも雪の中で長靴を履いて野球をやる。それを、私は美談だなあと、その頃思っていました。でも、本当はそうではないんですね。何も、雪の中で長靴履いてキャッチボールする必要はないんですね。むしろ、体育館に行ってバスケットボールをやるほうが、はるかに心肺能力は伸びる

んではないかな。アメリカのスポーツ選手はみんな、そうやって過ごしているんですね。

でも、今の日本の高校や大学のそういうスポーツ部のあり方をどうしていくかというのは、それはまたテーマがあまりにも大きすぎるので、とても、ここだけでは解決できないことなんですけれども、私は倉俣さんが提案してくださった、その一つのスポーツに日本はこだわりすぎているという、そのこともどこか皆さんの頭の中に置いておいてほしいなあと思うんですね。

だから、倉俣さんね、こどもの頃の少年野球ですと、日本はアメリカに勝つんですよね。世界で１位になるんですね。だんだん、進むにつれて、専門的にやってきたものは、大学野球は、もう五分五分か負けるんですよ。それは、いろいろなスポーツを日本がやってこなかった。こどもの頃から、それこそ、小学校の頃から、いろいろなスポーツに親しむということが、いかに大事なのではないかなあというふうに思いますが。

倉俣：一番いいモデルが、今日、河埜さん（元巨人の選手）がみえてたんですけど、ちょっと今お暇したみたいなんですけど。河埜さんはバレーボールを中学までされてて、高校から野球でドラフトに掛かってジャイアンツに来たというようなことですので、やはり、心肺能力が高ければ、先ほどの大澤先生の話にもありましたけど、バレーボールと野球と似たところがあるので、どうにでも併用がきくみたいなことは可能だと思います。ただ、そこの心肺能力が高くないと難しいという意味もあるんじゃないかと思います。

島村：それから、先ほど、倉俣さんのお話のなかで、スポーツのなかでの社会性という話が出ました。神尾さんのお話のなかにもあったんですが、四大メジャーのテニスに行くとですね、必ず、ボールパーソンがいます。ボールパーソンというのは少年少女がプレーをしている世界のトップレベルの選手のプレーのなかで、それぞれのコートの隅にいて、ボールが他のほうにいってしまうと走ってすぐ取って、そしてゲームが続けられるように、そういうボールパーソンという役割をこどもたちにやらせるんですね。これは、非常に社会性っていうのかな、大人の世界のなかにこどもたちを入れるということが当たり前のように、欧米ではやりますよね。

神尾：そうですね。グランドスラムという大きな大会が4つありますが、全ての大会で子供達が協力してくれています。

その子供達をみると自信を持って堂々とした顔つきをしています。両親から離れ一人で大人の中に入り大人と同じように決められた仕事を一生懸命やっている。大人と同じフィールドに立っているということに誇りを持つことができ、どんどん自信がついていくのではないかと感じます。

大人の中に入れて大丈夫かな？　ちゃんとできるかな？とご両親やコーチ達は不安に思うこともあると思いますが、機会があればそういう経験をさせてあげてほしいなぁと思います。外国のご両親は選手達のプレーより自分の子供が頑張っている姿を応援しに来て誇らしげに見ているという感じです。

島村：これは、池田先生、学校教育のなかにですね、そういうこどもたちを大人のなかに入れて、そこで社会性とか、大人のルールだとか、そういったものを見に付けさせていくといいましょうか、ある種の文化的なものも、私は関わってくると思うのですが、そのことについては、学校教育のなかでは、どういうふうに考えたらいいでしょうか。

池田：今、学校教育のなかでもいろいろな機会があります。今の話は、例えば、総合的学習の時間と関連すると思います。そこでは、いろいろなテーマを手がかりに、クラスや学校を飛び出していって、いろいろな社会的な施設でものを学んでい

くこともあるでしょう。そのなかで、大人の世界を経験していくなんてことも、今、行われているのですね。ですので、決して学校は閉ざされているわけではありません。

加えて言いますと、今回の学習指導要領改訂でも道徳をしっかりやりなさいという答申がありました。私は、個人的には「体育は動く道徳だ」と思っているのです。座学で学ぶことも重要ですが、体育は体を通してチームワークやいろいろな、助け合いを学んでいくという教科としての値打があります。特に、集団達成という言葉がありますが、仲間と一緒に何かを成し遂げる、一人じゃできないけど、みんなで協力すると何かできるっていうのは、体育や音楽などはやりやすい教科と言われています。こうした面も体育のなかでこれから意識的にこどもたちに伝えていけたらと思っております。

島村：私は、こどもたちの社会性というのを、こどもがスポーツをやっている頃から、大人が考えて、そして身に付けさせていくような、そういうフィールドを作るべきだということを常々思っています。それは、私は長いことアメリカのプロゴルフツアーの放送をしてきました。毎週行われているアメリカのプロゴルフツアーというのは、その会場に行くとですね。例えば、タイガーウッズやフィルミケルソンですとか、そういう世界のトップレベルの選手がプレーをしているなかで、小学生の男の子や女の子がキャリングボードといってスコアが書いてあるのを、ずっとコースの内側を歩きながら、コースの外にいる多くのギャラリーの皆さんにスコアを見せていくんですね。それを、こどもがやってるんです。小学校の３年から６年までのこどもが、そうやってコースのなかを歩いて、しかもキャリングボードを見せる。「今タイガーウッズはマイナス３だよ」って。フィルミケルソンは２オーバまでおっこっちゃったよ。

その１ホール終わるごとに、その数字を入れ替えて、そして、観客にギャラリーにその数字を見せていく。そういうことをアメリカのプロゴルフツアーではやっているんですね。これは、そういう中からいろいろなマナーですとか、あるいは、大会を運営していくのに、大人はどういうことをしているんだとか、選手はこういうときに声を出されたら困るんだとか、そういうことをひとりでに身につけていくような、そういうことをアメリカのプロスポーツのなかには、こどもをひとりでにそうやって社会参加をさせていくということがあります。なかなかこれは、日本のプロスポーツのなかではありません。

例えば、野球などでも、ボールボーイを、少年少女がやることがあります。でも大人の中に子供たちを恐れずに入れていくということが、わたくしは日本の子供スポーツ教育の中では、非常に大事な、社会性をどうやったら子供たちに身に付けさせるかということが、大事だというふうに思うんですね。

それがないから、だんだん進んでいくと、高校野球で不祥事が起きるんです。いつもスポーツをやるということは、社会とつながっている。スポーツをやっている選手は、いい時は取り上げてくれるけれども、どうも何かを起こしてしまうと、そこで、新聞でたたかれます。そういう社会性というものを、スポーツをやっていく選手というのは、子供のころから身に付けていかなくてはいけないんだよ、ということを、わたくしは理解してほしいなあと、いうふうに思っています。この社会性については、これ倉俣さん、どう思われますか。

倉俣：はい、まさしくその通りでですね、私普段５歳、６歳の子供に接している時も、年齢が40歳違うわけなんですね。（司会：はい）40歳違う人が、ちっちゃい子供に接せられるというのは、おそらく学校の先生か親かしかいない。たぶん電車の中で５歳、６歳の子供に何かやったら怒られる、ストーカーか何かだと訴えられちゃうと思うんですけども、そういう部分ではスポーツというのは、年齢を超えて、ちっちゃい子供からおじい

ちゃん、おばあちゃんまでを一気につなげることが出来ます。

アカデミーをやっていて感じるのは、目の前に遊歩道があったり、自動車が通ったりしてるんですけども、そこでですね、必ず誰でも、外国人でも誰でも立ち止まって、ちっちゃい子供が遊んでるのを、ビデオに撮ったり写真に撮ったり、自分の子供でなくてもですね、子供が元気はつらつ動き回ってるということが、おじいちゃん、おばあちゃんにとっても非常にうれしいことかなあ。（司会：ああ、そうですね。）そういう部分では、人をつなぐ、年齢を超えて人をつなぐパワーが、スポーツにはあるなあというのを実感します。

島村：これはやっぱり欧米、特にアメリカのそのスポーツのフィールドに比べると、日本はまだまだそこまでは行ってない、いや行きつつある。

倉俣：それはもう一緒ですね。日本のグランドがだいたい土のグランドで狭い、あまり整備されていないという、いろんな条件があるんですけども、おじいちゃんおばあちゃんが、あるいは知らない人が、ちっちゃい子供を見る目のやさしさというのは、日本も欧米もまったく変わらないんじゃないかなと思います。

島村：それと先ほど神尾さんが言われた、礼儀ですとか、マナーですとか、それから最近の子供は、会話をしなくなったと言われました。わたくしはスポーツ教育の中でも、大きなポイントになるのではないかと思っているんですが。じゃあ、何で子供たちは今会話をね、自由にしにくくなったか、この辺はどうですか。

神尾：なぜなのかはっきりとわかりませんが、ご家庭でご家族との会話が少なくなってしまっているのでしょうか…。

特に私もそうなのですが、働いてるお母さんが子供を育てていると、自分の仕事で一生懸命になり過ぎて、子供にご飯を食べさせ早く寝かせる、何か習い事をさせて自分の時間を少し作る、何か自分中心にちょっとなり過ぎてしまっているのかなと、いうふうに思うこともあるんです。そうすると会話は少なくなりますし、子供も一人遊びが得意になります。お友達と遊ぶ時間もご両親が働いているとなかなか難しく、当然お友達との遊び方もコミュニケーションの取り方もわからなくなります。そういったことを心配してテニス教室に連れて来られるご両親もいらっしゃいますが、どうやって入っていけばいいのかわらない子供の背中を一生懸命押しても、子供としては押されれば押されるほど拒否してしまうケースが多くみられます。

ただそこであきらめてしまわず、そこのスタッフやコーチがうまく輪の中に入れてくれますから、ご家庭で時間がとれないのならば、そういったコミュニケーションをとれる場に参加させてあげるというのは多いに活用してほしいと思います。そうすることによってスタッフと子供、そしてご両親とのコミュニケーションもとれるようになり、社会性を伸ばしていけるのではないかと思います。

島村：池田先生はどういうふうに思われますか。

池田：先ほど、身に付けて欲しい力の中で、コミュニケーションということを言いました。やはり人と人と直接対面して、言葉を通してお互いが気持ちを伝えるということは、とっても大切と思うのです。今は情報化やハイテクの進歩で、相手と居合わさなくても、インターネットや携帯でも会話ができてしまうという時代です。ですから、私は体育の持ち味というのはやはり、身体と身体で言葉を通しながら、お互いに気持ちを伝え合ったり、時にはトラブルを解決していったりすることも体育の持ち味だし、切り札としてPRできたらと思っています。

島村：体育、スポーツ教育の中で、その会話も育

んでいきたい。これ実はわたくしの関わっているテレビがやっぱりですね、一つ会話を家庭の中でしなくなってしまったという、私もその片棒を担いできたなあ、というふうに思っていることでもあります。

それからもう一つは、やっぱり携帯電話っていうのは、非常に大きいと思うんですね。神尾さんと私がよくパリで、ローランギャロスというパリのテニスの放送に行きます。その時に地下鉄に乗ると気がつきますよね。パリの地下鉄に乗っている人は、誰も携帯電話でメールを打っていません。日本の若者は、日本の子供は、心配だから友達にいつも携帯でメールを打つんですね。お話すれば済むことはしないで、会話をだんだんしなくなる。ですからこうやって指を動かして、そこで会話の文字を打ち込んでいくことはできますね、うまいですね。でも人に会った時に、素直な普通の会話がだんだんできなくなっていく。

別に、わたくしがNTTやソフトバンクが悪いと言っているわけではないですけども、でも日本は今そういう状況になっています。こんなに携帯文化が、逆に言うと、携帯は文化であると、わたくし思っていますけども、携帯文化が発達してしまうことによって、逆に会話をしなくなっている、そういう要因も一つあるんじゃないかなと思うんですが。神尾さん、海外に行った時どう思います？

神尾：島村さんの言われた通り、電車やバスに乗っている時に携帯電話を片手にメールを打っていたりという方が海外より日本の方が多いように思います。

携帯やメールが悪いというわけではなく、メールや手紙だからこそ伝えられる気持ち、“ありがとう”の一言でもメールでポンと送られて来た方がジーンときたりすることがあるのも事実だと思います。

ですが、相手の目を見て話をする言葉で何かを伝えるのはもっともっと気持ちが通じ合い何かを感じとることができるというのはわかってほしいです。

小さいうちから人の目を見て話をする、話をしている人の目を見るというのは教えてあげたいと思っています。

子供と接していると自分が悪いことをした時に怒られると目を見ないんですね。目を見れないんです。どんな時でも相手の目を見て何を言いたいのか、何を伝えようとしているのか、相手の心をよみとれるように努力することも大切なのではないでしょうか。

島村：はい。そろそろまとめに入りたいと思いますが、実は結論をきっちり出せるものではありません。みなさんがたで、今日お話をしていただいた中から、お聞きいただいた方々に、何か心に残るものがあれば、そして、身体とスポーツ教育、子供たちのその身体とスポーツ教育について考える機会を今日、皆様方にこの場を提供しましたので、その中から何か感じ取ってもらえるものがあればと思います。結論が出るものではないと思っていますが、最後に４人のシンポジストの皆様方に、このシンポジウムの中から、他の先生方の意見を聞いて、感じられたこともあると思いますので、今ひと言ずつ伺っていこうと思います。池田先生からどうぞ。

池田：今、わたくしも３人の方からお話を伺ったのですが、やはり世界は広いな、いろいろな国でこどもたちが、その国に応じた文化を受け、スポーツをやっているのだなというのがわかりました。私たちは今、これから日本のこどもたちを相手にするのですが、日本らしい部分と、それからスポーツは世界に羽ばたいているということの両方を大切にして、体育を中心にした、小学校教員養成を目指したいと思っています。どうもありがとうございました。

島村：では、大澤先生、どうぞ。

大澤：少し、東南アジアの話に偏り過ぎたかもしれませんが日本に軸足を置いたものも、もっと誇りを持って我々が、作って育てていかなきゃいかんかなと、いうふうに思っています。何年か前に、中国のオリンピック委員会の委員長とお話した時に感じたのですが、彼の視線はアメリカやヨーロッパには向いていなくて、韓国と日本の方に向いておりまして、アメリカのスタンダードに対して、我々のスタンダードがあるんだというようなことを、しきりに言っておられました。我々ももう少し日本的なものに自信を持っていいのかな、というふうに思っています。

文化人類学では、常識として文化相対主義ということをいいます。外国ばっかり見てないで、自分をしっかり見つめよということかなと思います。今日はどうもいろいろと話しましたが、どうぞ皆さん日本や東南アジアで、我々と同じような仕事をやっていただきたいと思います。

島村：はい、ありがとうございました。では、神尾さん、お願いします。

神尾：今日は先生方のお話を聞いてスポーツの素晴らしさを再確認しました。小さい子供からおじいちゃん、おばあちゃんまでみんなが一緒になって楽しめる、そしていろんなことを学び、教えてくれるんだなぁと…。

このスポーツの素晴らしさをこれからの私の活動の中でたくさんの方達に伝えていきたいと思います。

そして子供達と接する機会もたくさんありますので、ルールやマナー、あいさつなど日本の良さを決して忘れず、その中に海外の良さも取り入れながら子供達の持っている力を伸ばしていけたらいいなぁと思います。

島村：はい、ありがとうございました。では、倉俣さん、どうぞお願いします。

倉俣：はい。今日はどうもありがとうございました。もしこのような活動が、聞けるんであればですね、ジャイアンツで、現役の学生をですね、教習生として短期間受け入れるシステムがありますので、ただ国士舘の学生からは今年はありませんでしたので、ぜひ何名でも応募してみてください。よろしくお願いします。また大学が小学校の教員免許の学科を作ったということと、我々民間としては、その卒業生を受け入れる出口をですね、なんとしても学校の現場以外で作っていこうと、いうふうに思っていますので、ぜひ目を向けてください。今日はどうもありがとうございました。

島村：ありがとうございました。